

教員免許状更新講習のオンライン実施と対面実地の意識調査

砂原 悟* 小松川 浩* 齋藤 ひとみ** 竹川 慎哉** 松尾 直博***

*公立千歳科学技術大学

**愛知教育大学

***東京学芸大学

s-sunaha@photon.chitose.ac.jp hiroschi@photon.chitose.ac.jp hsaito@aecc.aichi-edu.ac.jp

takekawa@aecc.aichi-edu.ac.jp nmatsuo@u-gakugei.ac.jp

本稿では、ポストコロナによって活用の比率が高まると思われる教員免許状更新講習のオンライン実施の方向性について考察するために、実施形式の違いによって、受講を行った教員の意識にどのような差があるのかを調査した。分析の結果、各項目の平均値について有意差は認められなかったが、項目同士の相関係数から共通点と実施形式による差が見られた。

1. 背景および目的

平成21年4月1日より開始された教員免許更新制度において、更新講習は対面形式と通信形式が認められている。コロナ禍においては空間や移動の制約を受けにくいオンライン講習の活用比率が高まると思われる。

本発表では、ある年度に行った対面形式とオンライン形式の大規模な意識調査から、形式の違いによる意識の差を明らかにし、ポストコロナにおけるオンライン講習の方向性を述べる。

2. 調査について

2.1 対象者

調査の対象者は平成28、29年度の東京学芸大学及び愛知教育大学での対面講義の全受講者とeラーニング教員免許状更新講習推進機構(以後、KAGAC)の全受講者である

2.2 対象者の講習形式

対面形式では1講習を1教室で約6時間行い、了認定試験も講習日当日に実施する。1講習あたりの人数制限は110名程度である。

KAGACによるオンライン形式では、eラーニングで教科書の閲覧と演習問題の取り組みを行い、了認定試験は全国に試験会場を設けて一斉に実施する。

2.3 調査(アンケート)項目

- [1] 受講前に学びたいと思っていたテーマ
- [2] 受講を行い、どこに困難を感じたか
- [3] 受講後に向上したと思う知識やスキル
- [4] 受講した内容が役立つ場面
- [5] 受講後に自身でどのような学習を行ったか
- [6] 同僚に受講した講習を勧めたいか

2.4 調査の実施方法と回答者数

アンケートは対象者が受講時申請時に登録した

メールアドレスに送付した。メールにはWebアンケートフォームのURLが記載されており、対象者はこのフォームから回答を行う。重複回答や個人情報を含めないようにするために、フォームのURLには識別番号の付与を行った。

対面形式の受講者1559名、オンライン形式の受講者1387名、合計2946名から回答が得られた⁽¹⁾。

3. データ分析について

3.1 アンケート集計

本研究では各アンケート項目に対し表1の通り説明変数と尺度の定義を行った。

表1 アンケートと解釈について

項番	アンケート項目	説明変数	尺度
[1]	学びたいテーマの選択数	モチベーションの高さ	0~25
[2]	困難を感じた理由の選択数	受講の困難さ	0~11
[3]	スキルアップを感じたテーマの選択数	スキルアップの豊富さ	1~16
[4]	受講後に役立つと感じる場面の選択数	役だった場面の度合い	1~11
[5]	事後学習方法の選択数	事後のモチベーションの高さ	0~5
[6]	同僚に勧めたいかの程度	総合評価満足度	1~4

3.2 形式の違いによる意識の差について

3.2.1 各項目における平均値の違い

対面形式の受講者とオンライン形式の受講者の意識の違いの有無を調べるために、帰無仮説 H_0 「2つの形式において各項目の平均値は等しい」を立てて、有意水準は0.05でT検定を行い、t値

と p 値を求めた。結果は全ての項番において t 値がほぼ 0, p 値が 0.99 以上であるため, 2つの形式の各項番の平均値に差は認められなかった。

表2 対面形式の平均・標準偏差・分散値

項番	平均	標準偏差	分散
[1]	3.834	2.493	6.397
[2]	1.552	1.636	2.722
[3]	2.121	1.304	1.716
[4]	1.822	1.077	1.142
[5]	0.834	0.939	0.628
[6]	3.183	0.628	0.385

表3 オンライン形式の平均・標準偏差・分散値

項番	平均	標準偏差	分散
[1]	3.756	2.279	5.193
[2]	0.826	1.323	1.751
[3]	2.087	1.250	1.562
[4]	1.859	1.098	1.206
[5]	0.608	0.839	0.704
[6]	3.304	0.590	0.348

3.2.2 各項番における相関関係の違い

項番[1]～[6]についてピアソンの積率相関係数 r を求めた。また, 求めた相関係数が 0 ではないことを確認するために, 無相関の検定を有意水準 0.05 で実施した。

相関係数 0.2 以上の場合において対面形式とオンライン形式で相関係数に差があるかを調査するために, 帰無仮説 H_2 「2つの相関係数に差はない」を立てて, 2つの相関係数のから変換値 z_1, z_2 を計算し, 検定統計量 z を求めた。有意水準は 0.05 とし得られた結果を表 2 に示す。

表4 各項番と相関係数の差

項番 1	項番 2	相関係数 (対面)	相関係数 (e ラーニング)	相関係数の有意差
[1]	[3]	0.353	0.454	有
[1]	[4]	0.267	0.382	有
[3]	[4]	0.557	0.611	有
[3]	[5]	0.286	0.326	有
[4]	[6]	0.282	0.185	有
[5]	[6]	0.281	0.150	有
[2]	[6]	-0.239	-0.270	無
[3]	[6]	0.283	0.213	無
[4]	[5]	0.294	0.294	無

4. 考察

以上の形式の違いによる意識調査を踏まえて, ポストコロナの講義の在り方について考察を行う。

3.2.1 で述べた「各項番における平均値に差がない」という結果については, 対面形式とオンライン形式ともに講習から得られる学習内容や効果に差がないということを示唆している。先行研究²⁾では, 一般化可能性が難しいものの, 国家試験問題を教材とするオンライン講習が効果的であったという事例が示されており, 教員免許状更新講習についても資格試験の性質を有することから, 受講者が講習の効果を実感できたのではないかと考えられる。

3.2.2 で述べた「各項番と相関係数の差」については, 対面形式では[4][5]事後の事柄と[6]総合評価に弱い相関がみられる一方でオンライン形式では[4][5]事後の事柄と[6]の相関はほぼみられず, オンライン形式では対面形式と比較し, 事後につながる満足度に何らかの課題あることを示唆している。[1]モチベーションや[3]スキルアップの豊富さと[4]受講後に役立った場面の多さの相関係数が対面形式に比べてオンライン形式が高いという結果については, オンライン形式のほうが実務指向の受講者が多いことが予想される。

コロナ禍における教職員課題意識³⁾では「テクノロジーの利用可能性」と「この状況で求められる変化に適応する教師たちの余裕と意欲」が課題となっているため, 時間的な余裕確保や日程調整が容易な e ラーニング式のオンライン講習で ICT スキルの習得をサポートが重要であると考えられる。

参考文献

- (1) 齋藤 ひとみ, 小松川 浩, 竹川 慎哉, 松尾 直博, 砂原 悟: 教員免許状更新講習の講習形態による受講者の受講前後の意識:e ラーニング講習と対面講習の比較, 日本情報科教育学会 2018 年度 全国大会 (2018).
- (2) 小貫 睦巳: 国家試験問題を教材とする e ラーニングの取り組みとその学習効果の検討, 理学療法科学 論文誌, 2016 年 31 巻, 4 号, p. 535-539(2016)
- (3) コロナ禍における講師の心理状態並びに実態認識に関する調査報告著<速報版>
<https://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2020/05/965e1a8b62a673bef45d1042e6ec0030.pdf>